

本論は、東北公益文科大学開学記念行事の一環として開催された、英国ケンブリッジ大学教授S・ラージ先生の講演の翻訳である。

講演会は二〇〇一年六月二十一日に大学の大教室で開催された。講演終了後質疑の時間がもたれたが、昭和天皇の戦争責任をめぐって、辛い個人的体験をふまえて天皇の責任を厳しく追及する質問もでた。それに対してラージ先生は、個人の体験や気持ちは十分に理解できるとしながら、研究というものはそれらを超えて「資料」「証拠」に基づいて構築される必要があることを説明された。その冷静な、しかし心のこもる温かい説明が印象的であった。

なお、ラージ先生はミシガン大学とハーバード大学に学んだ後、オーストラリアのアデレード大学を経て、現在はケンブリッジ大学東洋学教授の職にある。（訳者解説）

## 「昭和天皇―神話から史実へ」

ステイブン・ラージ  
訳 小松 禮子

迪宮裕仁は、一九〇一年四月二十九日に誕生されました。天皇の在位期間は、一九二六年十二月二十五日から崩御された一九九八年一月七日までの長期に渡るものでした。「昭和」あるいは、「啓蒙された平和」という年号は、戦後の日

本を象徴していると思います。戦後の日本は民主化に始まり、敗戦からの復興を経て、あつという間に経済大国に発展しました。

しかしながら、昭和の初期は経済恐慌と一九三一年の満州事変に始まり、一九四五年に敗戦に至った戦争の時代でした。従って、ほとんどの人は昭和天皇を戦争のイメージでとらえるようになりました。この点一つを見ても、日本現代史の中で昭和天皇は最も議論を呼ぶ人物の一人であることが明らかでしょう。十年前に私が昭和天皇に関する著書を出版して以来、日本語でも英語でも、数多くの新しい著作が出版されたのも不思議ではありません。これらの新しい著作は、いずれも昭和天皇に対して批判的な立場に立っています。日本が天皇の名において戦った戦争は、昭和天皇に非常に大きな責任があるというのが共通のテーマになっています。いずれも、昭和天皇は戦争犯罪人であると主張しています。たまたま昨日発表になった、今年のピューリッツァー賞受賞作品も「裕仁と近代日本の形成」という昭和天皇に関する本でした。アメリカの歴史家ハーバード・ビックス氏の著作で、昭和天皇の戦争責任を論じたものです。

さて、昭和天皇に関して新資料が発見され続けていることから、歴史家が現代日本史において昭和天皇が果たした役割について研究するのは意味のあることだと思います。もしも、昭和天皇が悪事に責任があると言うのであれば、我々はそれを是非究明しなければなりません。しかしながら、私は、これらの新しい著書には、天皇の責任に関して「神話」が多いように思います。今日は、これらの神話の中から五点取り上げてお話ししたいと思います。もちろん皆さんもご存知のように、神話には真実が潜んでいることもあります。そして、実際にあった過去の出来事があるがままだに伝えているかも知れません。しかし、神話が歴史と違うのは、神話はあくまでも想像の世界であって、その信憑性は神話によって異なります。歴史家の目指す仕事は、信頼できる資料に基づいて神話と真実の違いを探し出すことなのです。ですから我々は、昭和天皇に対する理解を「神話」から「史実」へと移さなければなりません。それが私の今日の講演のタイトルでもあります。

## I 第一の神話

—昭和天皇には絶対的権力があつた—

この「神話」を基に話しを進めれば、昭和天皇は絶対「天皇制」の下で日本を統治し、人々を抑圧し、その結果日本を戦争に追いやったことになります。満州事変や一九三七年の日中戦争、そして一九四一年に真珠湾の攻撃をきっかけに勃発した太平洋戦争（かつては大東亜戦争と呼ばれていました）などを引き起こしたというのです。

昭和天皇に絶大な権力があつたと信じる人たちは、天皇がその権力を行使して日本を戦争に追いやったと主張しています。またその逆に、その権力を戦争を避けるために行使できたはずではないかという主張をしています。さて、この神話は正しいでしょうか。

ほとんどの神話がそうであるように、正しい部分もあります。理論的には、一八八九年に發布された明治憲法により、天皇には国家元首、および陸軍と海軍の最高司令官として、絶大な政治権力と軍事力が与えられました。さらに天皇は、天照大神の直系として最高の宗教的権限も付与されました。従って、多くの日本人にとって天皇は神様の存在でした。国歌の「君が代」や国旗の「日の丸」、毎年二月十一日に祝われる紀元節や英霊の眠る靖国神社の存在等が、この考え方を反映しています。

天皇制も、また権力・権限を有するものでした。警察、憲兵隊、特高は、日本における民主的な考え、および民主的な組織を弾圧しました。特に、革命を起こして天皇制を廃止しようと計画していた共產主義者たちは逮捕されました。日本の「自由思想家」たちでさえも、天皇制を批判しようものなら、弾圧を加えられました。これで分かるように、昭和天皇が大変権力・権限のある統治者であつたというイメージには、正しい部分もあるのです。

しかし、別の観点から言うと、この神話には大きな誤りがあります。天皇の権力に関して言えば、明治憲法は実に矛

盾した一面をもっていました。天皇の権力は絶対権であるのに、天皇ではなく内閣の責任において行使されるものと規定されていました。さらに、天皇の陸軍、海軍の統帥権に關しても、それが行使できるのは特に戦時はいうまでもなく、陸、海軍の参謀長たちとの事前の協議の上でのみ可能であると理解されていました。

従つて、実際には天皇にはそれほど大きな権力が与えられていなかったということになります。「天皇」という言葉の響きは、ローマ帝国のシーザー、ロシア帝国のツァー、ドイツ帝国のカイゼルのような人物がもっていた絶対権力を思わせませんが、日本の天皇の場合は、その権力が実際にはあまり限られていたので、天皇というよりはむしろ「ミカド」と呼ばれたほうが正しかったのではないのでしょうか。「ミカド」とは英語で言えば政府への「御用門」といった意味の古い言葉です。何故「ミカド」というと、天皇は国家の最高シンボルでしたが、自らは日本を統治したのではないからです。天皇には思い通りに行動する自由はなく、むしろ選ばれた統治者の一メンバーにすぎなかったのです。天皇の主な職務は、他の統治者たちとの合意協業作業を促進し、政府の決定事項を承認し、御名御璽とともに皇室の印章を公式に押すことだったのです。この仕事意外では、天皇は政治に關与しない「雲上人」でなければ行けませんでした。これはすべて真実です。昭和天皇のみでなく、天皇の祖父にあたる明治天皇の場合も、父の大正天皇の場合も同じことが言えます。

「昭和天皇に絶対的権力があつた」というこの神話は、政治面では真実を語っていないことがお分かり頂けたと思います。事実、一九三〇年代の初期から一九四五年までの期間は、日本の政治権力は軍閥に委ねられていました。然し、軍閥は政府を支配下におき、天皇の権威を利用して、軍の政策どころか戦争まで正当化したのです。

## Ⅱ 第二の神話 — 昭和天皇は「平和主義者」だった —

昭和天皇が「平和主義者」であったというイメージは、アメリカの占領政策によるもので、実は、アメリカが天皇を戦争裁判にかけず、天皇に戦後処理の役割を担わせるための手段だったのです。アメリカ政府の言い分は、昭和天皇は戦争に反対だったが、結局戦争しか考えていなかった軍部の言いなりにならざるを得なかったということでした。それは、昭和天皇には戦争責任がなかったということの意味しているのです。

近年出版されている昭和天皇に関する新著は、すべてこの平和主義者としての昭和天皇のイメージを否定しています。では、昭和天皇が「平和主義者」であったというのは真実なのでしょうか。

英、米の駐日大使は、昭和天皇は海洋生物学者として相模湾で生物を採集し、実験室で研究を続けるほうが、厄介な政治問題に関わるよりどれ程お幸せだったことかと昭和天皇と親交の深かった人たちと共に天皇の印象を語っていました。天皇は内気で慎重な方でした。常に謙虚で実に一生懸命公務に励んでおられました。天皇は他の国々と戦ってまで自らの帝国の拡大を望むような、強権的な「戦争好き」天皇ではありませんでした。むしろ天皇は平和を唱え、中国、ロシア、そして特にアメリカ、英国との平和維持を願っておられたと大使たちは語っていました。

実は、天皇は平和の維持を目指したが、実現出来なかった歴史的事実が確かにあるのです。一九三一年に満州事変が勃発した折、天皇は陸軍に戦争中止を命じていたのです。

一九三七年に日中戦争が始まったときも、直ちに中止するよう命じていました。一九三八年と、翌一九三九年に陸軍がロシア軍と交戦した時も、いずれの「事件」も大きな戦争に拡大する恐れがあったことから、天皇は即刻戦いを中止するよう命じていました。さらに、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発した翌年の一九四〇年には、天皇は日本が東南

アジアに領土拡張することに反対しました。もしそうなれば、アメリカとイギリスとの戦争に発展する恐れもあったかなのです。昭和天皇は、一九四一年の大半もアメリカとイギリスとの戦争に反対し続けますが、陸軍も海軍も天皇の反対を無視して、着々とこれらの国々との戦争準備を進めていたのです。

このような状況の下で、天皇が戦争を回避することは不可能でした。せめて天皇に出来たことは戦争を遅らせることでした。第一の神話でお話したように、昭和天皇にはあまり権力がなかったので、戦争を阻止する力がなかったのです。どの時点においても、天皇の平和への叫びは常に軍部に無視されていたのです。

これに加えて、政府内に残念にも分裂が起きました。外務省と軍部の間に、又陸軍と海軍の間にも分裂が起きました。このような紛争の下で、昭和天皇が一人一人に平和への希求を説得するのは大変困難なことでした。そのうち天皇の側近のアドバイザーまでが、重大な情報を天皇に知らせず、天皇には論争を呼ぶ政府の決議等には関与せず雲上人でいるよう忠告していたのです。なんと皮肉にも、天皇制の下で最も権限を発揮できなかった人の一人が天皇自身だったのです。

これでお分り頂けたと思いますが、昭和天皇が個人的には戦争に反対であったというのは真実です。天皇は、多くの機会に軍部の戦争計画に反対していたのです。その点では、天皇は単に軍部の操り人形になっていた訳でもありませんが、それだけ戦争に反対していながら、結果的には政府の戦争決定を承認した形になっていました。それはなぜなのでしょう。

それは、昭和天皇自身が立憲君主であるという立場をとられたからだ、私は思います。立憲君主は、個人的には反対な事項であっても、政府の決定には従い、これを承認しなければならないからです。これは明治天皇もされたことで、昭和天皇は明治天皇を手本にし、例にならうことを強く望んだのです。また、昭和天皇は、一九二一年に皇太子としてイギリスを訪問された際、英国王が、自身は賛同していない政府の政策に関してでも、立憲君主としての職務を遂行し

ている姿に深く感銘を受けていたことも事実です。それが天皇の職務の在り方だと考えたのです。

昭和天皇は、しばしば「独裁者」になることだけは絶対に避けたいと話していました。そのため、どれ程戦争に反対でも、統帥権を行使して軍部に戦争中止を命令することは避けました。天皇は、一九三六年の二・二六事件のような軍部の反乱を恐れていたのです。

何とか忠実な兵の力で反乱を抑えることは出来ましたが、その後は、もし天皇が公式に戦争に反対という劇的な抵抗をした場合、また起きるであろう反乱のリスクはあまりに大き過ぎると考えたのです。私は天皇のこの決断は正しかつたと思います。たとえ天皇が戦争反対と強硬な態度で臨んだとしても、軍部は耳もかさなかつたでしょう。当時の軍部は戦争をすることしか考えていませんでしたから、戦争を中止させることは不可能でした。いうまでもなく喜んだのは軍の指導者たちです。これで、国民に対して、昭和天皇のために戦うという大義名分が成立したのです。これが一般に日本の国民が信じていたことだったのでした。

昭和天皇が戦争を回避しようと努力したことは知られていません。では、昭和天皇は本当に「平和主義者」だったのでしょうか。もしそれがいかなる代償を払ってでも希求する平和であるのなら、私の答えはNOです。昭和天皇を理解する際に大事なことは、天皇は平和主義者というより、国家主義者だったということです。昭和天皇は若い時に、乃木大将および東郷元帥のような立派な軍人から政治教育、軍事教育を受け、一番大切なことは、どんなことがあっても、明治天皇から受け継ぐであろう日本帝国を守ることだと学びました。昭和の時代が始まった一九二六年までには、台湾、韓国、太平洋の多くの島々が日本帝国の支配下になり、日本の領土は拡大していきました。

昭和天皇は日本帝国存続の教えを真剣に受けとめ、支那事変勃発の時は、言うまでもなく勝利を願いました。その後も一九四一年の八月に、アメリカ軍が日本の東南アジアへの進軍を断念させるために石油供給の停止の策に出た数ヶ月後に、アメリカとイギリスに対して戦争を挑むことになるのです。

平和か帝国の存続かの選択を迫られた昭和天皇は、戦争を選びました。政府の指導者と同様、昭和天皇が強力な国家主義者だったという考え方をすれば、劇的な真珠湾攻撃で、米海軍を制したとの戦勝報告を受けた天皇が、安堵し大いに喜んだというのも容易に理解できるでしょう。誰にも負けない国家主義者であった天皇は、日本がこの大きな戦いに勝つか、または勝利しないまでも、惨敗を避けるためには、あらゆる努力を惜しまない覚悟でした。天皇は、繰り返し国民に勝利に向けてすべての犠牲を払うよう求め、国家のために戦って命を落とした日本兵士の霊が眠る靖国神社を参拝しました。さらに、国民の前に姿を見せる時は、軍服に身を包み、白馬に跨り、国家の懸命な戦勝のための努力の象徴となったのです。

皇居では、毎日軍事指導者に詳細に戦略の説明を受けながら、最高司令官としての職務を遂行しました。後に、フィリピンや沖縄の戦争で風向きが悪くなった時は、日本軍の「決定的勝利」を宣言して敵軍打倒を叫びました。神風特攻隊の命が犠牲になり、天皇も心を痛めました。しかし、これ以外に日本を救う方法はないと信じ、尊い命をかけた使命を承認したのです。

ここでの私の論点は、昭和天皇が「平和主義者」であったという神話には正しい部分もあり、また誤りの部分もあるということです。天皇が戦争を回避しようとした点では正しいのですが、帝国を救うために戦争をも辞さなかった天皇の国家主義者としてのより奥深い決断を無視している点では誤りです。

昭和天皇に戦争責任が全くないというのも間違いです。天皇の名の下で戦った戦争は、天皇の計画ではなく軍部の計画だったとはいえ、結果的には、天皇が公式に承認し、支那事変の時も、第二次世界大戦の時も、天皇は日本の戦勝のために大きな貢献をしたからです。



### Ⅲ 第三の神話

—支那事変やアジア・太平洋地域における第2次世界大戦での

日本軍の残虐行為に対して昭和天皇にも非難の余地がある—

この神話は、日本軍による戦時残虐行為に触れることです。一例を挙げると、日中戦争が始まった頃、日本軍が南京に侵入した際、三十万人にもものぼる罪のない中国人を虐殺し、婦女に暴行をしたと言われる事件です。これは一九三七年に起きた恐るべき事件で、南京大虐殺と呼ばれました。

他の例として、陸軍第七三一部隊の残忍な行為が挙げられます。日本人医師の力を借りて第七三一部隊の兵士たちは、中国人および満州残留のヨーロッパ人捕虜に多くの生物化学兵器による人体実験を試み、これらの兵器を使用して多数の中国人を殺害したのです。さらに、第二次世界大戦中、東南アジアでヨーロッパ人とアジア人の戦争捕虜たちに日本軍が課した、過酷な道路や橋作り等の強制労働のことを皆さんは学びましたか。この労働で、何千人もの捕虜たちが熱帯病にかかり、薬も与えられないまま死んでいきました。他の多くの捕虜も十分な食物が与えられず餓死していきました。これも日本の残酷な戦いの一面だったのです。

さて、この第三の神話によると、昭和天皇はこれらの日本の犯した残虐な全行為に対して責任があるということになります。これらの行為は勿論昭和天皇が実行したものではありませんが、天皇がこれらの行為の実行を命じた可能性がある」と主張する歴史家が何人かいます。この歴史家たちは、天皇がこれらの残虐行為を阻止する努力を怠ったのだから、天皇に責任があると主張しています。これは正しいでしょうか。昭和天皇は日本の残虐行為に責任があるのでしょうか。

他の神話と同様に、この第三の神話にも真実の部分があります。昭和天皇は何といっても国家元首であり、陸・海軍の最高司令官でしたから、道義上、又厳密には、法的にも天皇は戦時に日本軍が行なった南京大虐殺や第七三一部隊で

使われた毒物、そして戦争捕虜に対する残虐行為すべてに責任があったのです。

昭和天皇が、結果的には非常に残酷な行為となる幾つかの戦争作戦を承認したのも事実です。例を挙げると、中国北部のいくつもの村を焼き払い、そこに住む多くの人々を殺害する計画も承認しています。これは、日本軍に抵抗する北部の共産軍を壊滅させるための策でしたが、実際には、自分の村が焼かれたことで、村の農民たちは日本に恐れを抱くようになりました。結局日本軍は農民たちの反感をかって、その多くを敵にまわす結果となりました。

昭和天皇は、残酷な方ではありませんでした。ここで重要なことは、天皇が自らこの残酷な計画を立てたのではないということです。それらは、陸軍が計画したことでした。しかしまた、昭和天皇はそれを承認しました。何故承認したのでしょうか。

その理由は、まず第一に明治時代からの通例により、陸、海軍の参謀たちによって立てられた戦時の軍事計画には天皇の承認が求められていたのです。繰り返しになりますが、天皇は絶対君主ではありませんでした。外からは、最高司令官として権力があるように見えても、実際には、陸、海軍参謀の軍事計画を承認し、これに協力するという立場でしかなかったのです。

第二の理由は、私も昭和天皇は中国北部の事件については、その計画を承認していたと思います。強力な日本の国家主義者として、天皇が中国との戦争には、どんな手段を使っても勝利を収めなければならないと考えるのは当然のことだったからです。先にも触れましたが、天皇は戦争を回避する努力をしました。しかし、いざ開戦の段になると、政府全体がそう願うように、天皇も日本の戦勝を祈願したのです。これは当たり前なことと、どこの世界に戦勝を望まない指導者がいるでしょうか。

それでは、前に述べた南京大虐殺、陸軍第三部隊、そしてヨーロッパ人とアジア人の戦争捕虜の苦しみについてはどうでしょうか。現時点においては、いまだどの歴史家も、それらのどの残虐行為も天皇が命令したという事実を突き

止めてはいません。東京からは、誰も南京大虐殺の司令を発動していません。これは、日本軍の兵士が行き詰まったあげく、そのような行為に出してしまったのです。その結果は、犠牲者にとっては悲惨なものでしたが、大戦場ではこのようなことはよく起こります。兵士は戦いに無我夢中で前後不覚に陥り、罪のない人を想像を絶する苦しみ追いやるが多々あるのです。

陸軍第七三一部隊の残虐行為は公にされず、日本の陸軍内部でさえも、このことは秘密にされていました。陸軍の指導者たちも、そして昭和天皇でさえも、第七三一部隊は浄水作業の責務を担っていたとしか報告されていなかったのです。昭和天皇は、この事実を後で入手したかも知れませんが、その時はもう既に手の施しようもなかったのでしょう。

ヨーロッパ人とアジア人の戦争捕虜に対する残虐な扱いに関しては、責任が問われるべきは陸軍であって昭和天皇ではありません。天皇は、この事実を知った時、陸軍に中止するように命令していますが、陸軍は完全に天皇を無視しました。陸軍は、たとえそのために命を落とす犠牲者が出たとしても、絶対に東南アジアにこれらの道路と橋を必要としていたのです。

要するに、第三の神話である中国及びその他の地域における日本軍の残虐行為は、昭和天皇が積極的に指揮をとったという解釈には問題があります。何故ならば、それを裏付ける事実がないからです。昭和天皇は国家元首として、また軍部の最高司令官として、法的に、多分道義的にも日本軍の残虐行為に責任がありました。しかしながら、天皇には当時の戦時国際法を破る意図はありませんでした。日本が真珠湾攻撃の後でアメリカ政府に宣戦布告したことについては、昭和天皇は激怒しました。天皇は宣戦布告は真珠湾攻撃の前に行うように願っていたからです。天皇は国家主義でしたが、人道に悖るような卑劣な犯罪を容認するような人物ではありませんでした。天皇は、ヒトラーのような残酷な「戦争犯罪人」ではありません。

## IV 第四の神話

—一九四五年八月のアメリカ政府による広島・長崎への  
原爆投下決定に対して昭和天皇は間接的責任がある—

この第四の神話によると、日本政府には、一九四五年の七月末に世界大戦を終結する好機が与えられていたというのです。七月二十六日にアメリカと連合国軍は、ポツダム宣言を発令し、日本に「無条件降伏」を喚起した時、日本は敗戦状態にありました。アメリカ軍による爆撃は日夜におよび、アメリカ海軍は日本海域を制し、日本の経済は破綻状態に追い込まれました。これは、日本が戦争を継続できない状態であったことを意味します。

しかし、日本はそれでも降伏を拒みました。なぜでしょうか。この第四の神話によると、昭和天皇が日本政府に降伏させなかったというのです。その説では、「無条件降伏」ということで、天皇は皇室の将来と天皇自身の将来を危惧したからということになります。

結局、アメリカは日本を降伏させるために八月六日に広島、そして八月八日には長崎に原爆を投下する決定に及びました。周知の通り、両市とも崩壊し、一瞬にして何千もの命が奪われました。一命は取りとめた人達も一生恐ろしい火傷の跡や放射能中毒を背負って生きていくことになりました。

この神話によると、昭和天皇は日本の国民の幸福よりも皇室と天皇自身の将来を案じていたことになります。その結果、広島と長崎に意味のない苦悩を与え、八月十五日まで意味もなく日本軍の降伏を引き延ばしたということです。これは昭和天皇に対する非常に厳しい批判です。そしてこれもまた、昭和天皇にも中国との戦争と第二次世界大戦に責任がある主張する歴史家たちの考えに基づいています。長崎市の本島市長もこの第四の神話を信じていました。ですから、一九八八年後半、昭和天皇の病状が悪化し、もう長くないとわかった時、本島市長は、昭和天皇が長崎と広島市民を苦

難に追いやったと激しく批判し、右翼の狂信者にピストルで撃たれました。しかし、幸い一命を取りとめました。

私は、昭和天皇を批判する人たちから天皇を守ろうという気持ちは毛頭ありません。そしてすでに申し上げたように、昭和天皇にも戦争に対して十分非難の余地があると考えています。しかし、私がここで問題だと思うのは、今日お話しした他の神話と同様、この第四の神話にも事実より感情で作り上げられている部分があるということです。それは、七月末に昭和天皇にはポツダム宣言と日本の「無条件降伏」を受け入れる用意があったことをはっきり証明する事実があるからです。外務大臣の東郷茂徳もこれに明快な態度で同意していました。他の日本の指導者の何人かも直ちに戦争を終結することを望みました。しかしながら、陸軍の戦争を続行する決意は確固たるものでした。陸軍の指導者たちは、日本の国民が竹槍を持つて陸軍に加わり、アメリカの侵入者と海浜地帯や山中で戦ってくれるよう望んだほどです。黙殺策を行使して、ポツダム宣言を拒否し続けていたのは陸軍だったのです。陸軍は連合軍から皇室存続に対する保証をとりつけるまでは、戦争を終結することなど絶対に出来ないと言張りました。しかし、陸軍が本当に恐れていたのは皇室の存亡ではなく、敗戦の屈辱感だったのです。

私たちは、何故長崎の本島等市長が原爆責任で昭和天皇を非難したか分かります。これらの原爆兵器は、東京や他の地域に投下された焼夷弾と同様、そこに住んでいる人たちにとっては恐るべき兵器だったのです。しかし、昭和天皇に原爆責任を問うのは筋違いです。もし責任を問われるべき者がいたとするならば、それはアメリカ軍です。アメリカは罪のない人に原爆を投下したのみでなく、日本の皇室を存続させると既に打ち出していた決定事項を日本に通達していません。これがポツダム宣言の中で明白にされていれば、七月末に日本は降伏をして、原爆を免れていたことでしょう。

いずれにせよ、原爆だけでは日本はまだ降伏していなかったでしょう。最終的に日本を終戦に導いたのは、八月八日のロシア軍の宣戦布告と、その直後の同軍によるあつという間の満州侵略でした。これで事態は急変し、鈴木貫太郎首

相は、昭和天皇の裁断を要請して終戦に至ったのです。実は、陸軍の戦争終決への反対が強硬だったため、昭和天皇は、八月九日と八月十四日と、二度裁断を要請されていたのです。

ついに、八月十五日昭和天皇はラジオで終戦を宣言しました。国民はこの放送を聞いて、敗北の事実を激しく動揺しましたが、同時についに終戦となり、大きく安堵したのです。当然のことですが、八月十五日は日本の歴史上大変重要な日となりました。今回、小泉首相も、靖国神社を参拝するとの意向を表明したばかりです。決して戦争をたたえるためではなく、首相は戦争犠牲者の霊に敬意を表するために参拝するというのです。

## V 第五の神話

—昭和天皇は、一九四五年以来今日まで、一度も公式に戦争責任を認めたことがない。それは、天皇が自身のとった行動を反省していないからだ—

昭和天皇は、確かに公式の場で自身の戦争責任を謝罪していません。しかしこれは天皇自身の戦争における役割、即ち政府の戦争政策に同意した事実や、戦勝に向けた努力の象徴になったことに対して謝罪する気持ちがないという意味ではないのです。むしろ事実はその逆で、私は天皇はこれら全部のことを、そして日本全体が敗戦したことを遺憾に思っていたと確信しています。

一九四五年の九月二日に、日本が東京湾に浮かぶアメリカ船艦上で、公式に連合国に日本の降伏を告げてからまもなく、昭和天皇はアドバイザーたちに、ご自身の退位の意向と、まだ幼い子供であった皇太子明仁に摂政と共に天皇の座を譲る意向を伝えました。天皇はまた、第二次世界大戦時に首相であった東条英機を含む政府の指導者に代わって、「戦争犯罪」の法廷に立つことを辞さないと話しています。これが昭和天皇の戦争責任のとり方だったのです。

しかしながら、アメリカ政府は、昭和天皇の退位に同意しなかったどころか、「戦争犯罪」の法廷にも立たせませんでした。日本を支配しようと決断したアメリカは、新しい民主的な日本の再建の象徴として、昭和天皇に職務を継続して欲しかったのです。また、アメリカは、昭和天皇を「戦争犯罪人」扱いをすれば、日本の国民が黙っていないと恐れてもいたのです。戦後、天皇が国内各地を視察した際、国民がまだ天皇を大変尊敬しているということは明白でした。天皇は訪れる先々で、大勢の国民の歓迎を受けました。皆、昭和天皇が自分たちの苦しみを分かっていたことを知っていたのです。

次の年から、昭和天皇は戦争に関して、しばしば公式の席でお言葉を述べ、多くの機会に、戦争は日本人とアジア人にとって悲痛なものであったと話をしています。しかし、天皇自身の役割については言及することはありませんでした。一九七五年に天皇は、アメリカを訪問した折、フオード大統領主催の晩餐会で、「あの私が深く悲しみとする最も不幸な、かの戦争は……」と話をしたのです。これは天皇の「お言葉」の中で、最も公式の戦争謝罪に近いものでした。天皇は自身の役割について少し触れたこともあったでしょうが、これは許されないことでした。天皇の「お言葉」は、一字一句宮内庁と外務省で決められていたからです。ですから、そのときの言葉も、日本の官僚が書いたものでした。昭和天皇には、政治的にはまだ自由がなかったのです。

確かに、昭和天皇は公式の席で一度も戦争謝罪をしませんでしたが、それは天皇が自身の行動に罪の意識がないというわけではありません。今思うに、アメリカ軍は、昭和天皇の退位を承認すべきだったでしょう。あるいは、少なくとも、東京戦争犯罪裁判で証人として証言する機会を与えるべきだったでしょう。そうすれば、ドイツ国民がしたように、日本の国民全体が、戦争を指示した責任をもっと考えさせられたかも知れません。

しかし、昭和天皇は、国家が敗戦した後も職務を続行しなければなりませんでした。歴史上数少ない戦争指導者の一人だったのです。天皇は、戦争責任の重荷を背負ったまま、その生涯を閉じました。過去をこのように重く背負い続け

ること自体が天皇に与えられた処罰だったのです。

結論に入りますが、皆さんが日本の現代史を多く学ぶことは、非常に大切なことです。同時に、それはけつして易しいことではありません。今日の日本には、「自由主義者」と自称する歴史家がいますが、彼らは本当は国家主義的歴史家といえます。この歴史家たちは、学校で教える教科書は、過去の出来事を正確に伝えるものではないと論じながらも、彼らは天皇の戦争責任を否定しているのです。これでは、日本の国民にただ誇りを持たせようと、再び新たな神話を作りあげているだけではないでしょうか。ただ、これらの神話も、その幾つかには、正しい部分も含まれています。例えば、南京大虐殺での犠牲者の数は、他の歴史家たちが主張していたよりは少なかったことが指摘されています。しかし、日本軍が南京でした事自体は、実に卑劣な行為でした。どんな場合でも、歴史は単に国民に誇りをもたせるために書いてはいけません。他方で、今日の日本には、いや他の国も同じですが、自称「進歩主義者」の歴史家があります。彼らは、過去の出来事の真実、とりわけ昭和天皇の戦争責任の真実を明らかにしたいがために、彼らもまた天皇について新しい神話をつくり上げています。それは、今日の私の話でも取り上げた、昭和天皇には大きな権力があって、日本を戦争に導いたという神話、あるいはその権力行使して戦争を回避することも出来たという神話です。さらにまた、昭和天皇が日本軍の残忍な行為に責任があり、原爆にも責任があるという神話、そして昭和天皇は戦争責任に對して罪の意識がないという神話です。

さて、学生の皆さん、どうかこの大学に在学中、神話と史実の違いが分かるように、そしてその上で、確固たる歴史的な証拠に基づいて、過去の出来事を、自分なりの判断できるようになることを願ってやみません。

今日はご清聴有難うございました。